

平成 29 年度 第 3 回小松市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成 30 年 3 月 30 日 (金)
開会 10 時 30 分 閉会 11 時 30 分

2 会 場 小松市役所 3 階 3B 応接室

3 出席者 小松市長 和田 慎司 (議長)

小松市教育委員会

教 育 長 石黒 和彦
委 員 北村 嘉章
委 員 蘆邊 千鶴子
委 員 吉原 慎吾【欠席】
委 員 中惣 恭子

(ゲストオブザーバー)

公立小松大学学長 (予定者)	山本 博
小松市立高等学校校長	諸角 敏彦
小松市教育・保育協議会会長	森 和美
石川県幼稚園協会加南支部長	上出 美智代
公立保育所代表	高林 紀久子

(事務局関係)

総合政策部長兼経営政策課長	越田 幸宏
総合政策部 経営政策課担当課長	中野 芳美
総合政策部 経営政策課事務員	嶋田 裕介
教育委員会事務局 教育次長兼教育庶務課長	山本 裕
教育委員会事務局 教育次長	道端 祐一郎
教育委員会事務局 学校教育課長	吉田 明生
教育委員会事務局 青少年育成課長	東谷 勝美
教育委員会事務局 学校教育課指導主事 (参事)	
兼未来の教育課指導主事 (参事)	中谷 光恵
教育委員会事務局 教育庶務課参事	池田 美和子

4 討議事項 (1) 平成 30 年度小松市の教育プラン
(2) 幼保から大学までの教育の連続性のあり方
・理科教育
・グローバル人材の育成

5 会議の経過及び発言

○開 会

○和田市長あいさつ

- ・来年度の教育の基本方針について、今回はゲストオブザーバーの皆さんも交えて、いろいろ意見交換していきたい。
- ・科学技術やICTなど、新しい教育をさらに充実させることが平成30年度の目標であり、それらについてもご説明をいただきたい。

◆こまつは際立った学びのまち

〈議長〉【資料】により説明

- ・こまつは際立った学びのまちということで、伝統芸能を学べるうらやみよつき、世界的企業の教育機関に加え、新たに駅南にKOMATSU A×Z SQUAREがオープンし、2階・3階には公立小松大学、1階には子どもたちが遊びを通じて学ぶカブッキーランドということで、駅周辺にさまざまな学びのゾーンをつくってきた。
- ・5年後には新幹線が開業する。まちの方向性を駅周辺に集約するという基本的な方針のもとこの8年間進めてきた。
- ・今日は保育園や幼稚園の先生方にも来ていただいた。4年前に認定こども園の制度が開始され、小松市の移行率は現在85パーセントとなっている。幼児教育の充実については、県内トップクラスだと思う。量的にも質的にも高い。これは過去からの積み重ねであると思われる。
- ・4月3日には、公立小松大学が開学する。高等教育機関として、小松短期大学は30年、看護学校は25年という実績を積んだ大学ということで、文部科学省からもその方向性について、大変評価をいただいている。
- ・学生の入学手続きはほぼ終わり、定員240名のところ250数名ということで、1～2名増減すると思うが、4つの学科が全て定員を超えた。また、教授陣や、大学の指針を決める客員教授も決めさせていただいており、良きスタートが切れるかと思っている。
- ・明治以来の教育改革といわれる中、道徳やプログラミング、英語を強化するなどして大学受験に活かす。大学ができることによって、高校、中学校、小学校の求められるものがグレードアップしていく。
- ・資料に市民大学、リカレント教育とあるが、欧米では、大学等で再び学ぶことが、ごく自然になってきている。日本は世界の中でも長寿国であり、まさにそれがいかせるのではないかと。定年後に新たな勉強をすとか、家庭の事情で高校を卒業して就職したが、もう一度大学等で勉強をして起業家を志すなど。企業内学校を設けて、基礎教育からきちんと行っている企業もある。いろいろな選択ができることは素晴らしいことである。
- ・公立小松大学、社会福祉協議会、まちづくり市民財団が中心となって、市民大学の開校をめざしてスタートをしている。

- ・さまざまな教育というものをこれからどう考えていくのか。義務教育だけでなく、子どもから大学生までの教育をどうしていくか、どういった人材を社会に送り出すか、またリカレントについてもやっていくということで、小松市総合教育会議の充実、強化を提案したい。
- ・今回、公立小松大学学長（予定者）、市立高等学校校長、こども園、幼稚園、公立保育所の代表の先生方にも入っていただいた。テーマにより、今後もその都度ご案内をさせていただきたい。ゲストオブザーバーの皆さんから、テーマについて提案もいただきたい。

〈議長〉では、皆さんからご意見、ご質問をいただきたい。

〈北村委員〉義務教育はもとより生涯教育を通じて人間性を高めていくことが、ひいては地域の発展につながる。総合教育会議でいろいろな方々からアイデアを出していくことは大事である。

〈山本ゲストオブザーバー〉大学の立場から、小松市の総合教育に貢献できればと思っている。忌憚のないご意見をいただきたい。

〈諸角ゲストオブザーバー〉平成30年は高校の大きな改革の時期であり、しっかり対応していきたい。

〈森ゲストオブザーバー〉幼稚園や保育園の新教育・保育要領が、4年からスタートする。幼児教育の重要性を改めて認識している。

〈上出ゲストオブザーバー〉

- ・文部科学省の学習指導要領が改訂となる。これまでの基盤をいかしつつ、新たな内容を読み解いていくことが肝要である。
- ・すべてがセッティングされると、本来、親御さんが担うべき部分が、我々の手にかかってしまう。両者のバランスも大事であると感じている。

〈議長〉カブッキーランドが盛況で、約4万人の方に来館いただいている。利用者の約6割が、市外・県外の方である。皆と友達になって遊んだり、自分で遊び方を習得して、思い思いに楽しんでいる。

〈蘆邊委員〉幼児期から生涯を通じた学びは大切であり、これからの取り組みに期待している。

〈中惣委員〉みよっさ、カブッキーランド、公立小松大学など総合して、小松駅の周辺がさらに活性化するように望んでいる。

○討議事項

(2) 平成 30 年度小松市の教育プラン

〈石黒教育長〉【資料】により説明

- ・教育の連続性は大事であり、特に幼、保、こども園の部分、先ほど保護者の親としての役割をどう果たしていくかというお話があった。もう一つ言えば、乳児からの親教育が大事になってくる。
- ・小中学校の義務教育において、基礎教養をしっかりと定着させていく。そして高校、大学、生涯教育となっていく。日本の社会を振り返ると、質より量を大事にした時代から、量より質を大事にする時代に変化している。まさに、量から質へ、どうすれば豊かに生きられるかというところに生涯学習の基本があるのではないかと思っている。

【平成 30 年度の小松教育委員会の教育設計】

①これまでの取り組みと成果

- ・発表力を大事にしてきた。自分の思いをいかに発表できるかということが、これから大事になるという視点で捉えてきた。授業や学校行事の中でその部分を大事にしてきた。
- ・昨年 8 月に加賀地区の意見発表会があり、上位をほとんど小松の中学生が占めた。発表の仕方が上手というよりも内容がしっかりしている。内容を自分のものとして、原稿を見ずに発表することができたということが評価されている。
- ・グローバル人材としての道徳性すなわち、他の人のことを親身になって考えてあげられる、協働できるという視点での道徳性ということでは、青少年育成大会というものがあり、今年度は、小学校、中学校、高校の児童・生徒のボランティアで運営しようということで募集をしたところ、50 名から 60 名の応募があった。お客様の接待や受付、司会など全部割り振りをしてしたが、残念ながら大雪のため実現しなかった。そういう思いは大変ありがたく、小松の子ども達が大きく成長していることを感じた。
- ・論理的な思考力の育成ということで、具体的には、プログラミング教育で、市では 5 つの教材を 1 つにしてユニットをつくっている。これまで 2 年間掛けて研究をしていた。サイエンスヒルズこまつがあり、他の地域に比べて有利なプログラミング教育ができる。大学とも連携をとってより深めていきたい。
- ・今年度は中央の大会に先進的な事例として発表させていただいた。小松市の取り組みが広がっていると考えている。
- ・小学校・中学校で年に一回全国学力調査が実施されている。石川県は全国でもトップクラスだが、石川県の中でも小松市は良い位置にいるということをお伝えしたい。
- ・学ぶということを子ども達が少しずつ身に付けてきていると思っている。社会が教育に要求する内容が変わってきている。2020 年度より新しい学習指導要領が小学校・中学校・高校と順番に実施される。道徳が教科になったり、英語が小学校の教科になるのはもちろんだが、それ以上に先生が教えるということよりも、子ども達が自分で学んだということが大事にされているということが大きな変化であり、教育の転換といってもよい。

- ・幼稚園、保育所等も基本的には同じだと思っており、高校も大学も同じようなことだと思っている。
- ・学びの環境づくりが必要だと考える。公立小松大学の存在というものは、小松の教育にとって大きなものになる。
- ・資料にある、規範意識、論理的な思考力、プログラミング教育、「学び」の力、コミュニケーション能力に少しパワーをいただければと思う。この3つがグローバル人材育成に大事な部分だと思っている。
- ・子ども達を認めることがすごく大事な部分だと思っている。心理学的にも、自分が子ども達を好きになるという感情を持つということ。頑張り抜くという力が付くということ。また自分自身に自信を持つという3つの力が確実に付くということである。
- ・今年度教育委員会では、今まではレギュラーで活躍した選手が非常に優遇されたり、褒められてきたが、部活動の成績とは別に、下積みで一生懸命に3年間努力してきた子どもを各学校から選出して、表彰する制度を作った。
- ・来年度から、中学3年生対象に英語力を認める、褒める、支えるという視点から検証していきたいと考えている。
- ・教育というのは、非常に見えない部分、見えない指導力、見えない環境というものが大事にされていると思う。小松市はいろいろなところで、先を見据えた計画的な教育が展開されていると思っている。
- ・これから具体的に力を入れていくことを担当から説明させていただきたい。

(3) 幼保から大学までの教育の連続性のありかた

・理科教育

〈事務局：中谷学校教育課指導主事（参事）兼未来の教育課指導主事（参事）〉

【資料】により説明

①プログラミング推進事業

- ・2020年度から実施される新学習指導要領では、小学校においてプログラミング教育が導入されることとなっている。人工知能の急速な進化に伴い、さまざまなものが人間がつくったプログラムで動かされていることに気付き、その役割を理解しながら、時代に合った情報技術を効果的に活用し解決していくことの重要性が求められている。
- ・こうした状況を踏まえて、児童・生徒のプログラミング的志向、つまり論理的に考えていく力の育成を図る必要がある。
- ・プログラミング教育を実施するにあたり、各学校が適切な教材を準備して、すべての教員が学習指導要領の趣旨を踏まえ指導を行うことは、現在の多忙な学校においては、容易なことではない。
- ・小学校の学習指導要領には、プログラミングに関する記載が3箇所だけあるが、小松市教育センターではどの教員も基本的なプログラミング教育ができるユニットを作成した。その上で教科との関連を図ることとしている。
- ・ユニット教材の作成にあたり、理解する学習と体験する学習を組み合わせると効果的

にプログラミング学習ができるように考えた。理解する学習は学校で行い、机上の学習だけで追いつかない体験の学習は、サイエンスヒルズこまつのレゴを使ったプログラミング体験を活用することとした。

- ・未来の技術者を育てるためのレゴプログラミングをサイエンスヒルズこまつと連携して活用することで、体験の学習として位置付けられると考えた。
- ・このことは、教材の準備、機器の購入、操作の指導といった学校や教員の負担を減らすことにもつながると考える。
- ・またユニットを使用して学習した児童が上級コースを学習したいと思ったときには、サイエンスヒルズこまつで能力に応じてさまざまなコースを選択して学習することが可能である。プログラミングを極めていくこともできる。
- ・いずれは公立小松大学の学生とのコラボレーションもできればと考えている。この推進事業は専門的な視点から、茨城大学の小林準教授に監修をお願いして、実施状況を含めて指導いただいている。

<議長>4月からの上級コースは、募集から4分間で定員に達した。サイエンスヒルズこまつは小松にあるので、小松市民専用のコースにしても良いのかもしれない。

②中学生サミットについて

- ・中学生サミットは、サミットの企画、運営を通して生徒の自治的意識や主体性の向上を推進するとともに、教員の指導力向上も目指す各校の活動の活性化を図ることを目的としている。
- ・小松市の活動は全国的にも名が知られ、1月27日には、大阪での関西スマホサミットに招待され、関西2府4県、福島県の児童・生徒・保護者約600名を前に、小松市中学生サミット実行委員会の生徒が参加、発表を行った。
- ・小松市中学生サミットの取り組みについて過去3年間の経緯、今後の実行委員会の活動、市PTA連合会との連携など、講演会で動画を入れながら説明した。
- ・生徒が自分たちで課題を分析し、活動を決め、自分たちで企画・運営していること。その活動を先生方やPTAや保護者の方々など、大人が支えていることを伝えることができた。
- ・先進的な事例として各県の中学生、保護者から小松市の取り組みがとても参考になったという意見をいただいた。これまでの活動を通して、参加した中学生が今後ずっとサミットを存続させ、小松市を良くしてほしいと希望している。
- ・スマホやインターネットが関係したさまざまな事件が増えており、ネットトラブルに関する最新の情報を生徒に伝えていくことは必要である。幸いなことに、平成28年度から市PTA連合会と連携して行っている、ネット問題についての各学校の取り組みが、少しずつ充実してきており、保護者やの実行委員担当の向上心も高まってきている。
- ・昨年度のネットを考える取り組みが、生徒の設定した目標を上回る数値を達成したことを受け、平成30年度には内容を充実させ、担当教諭と連携して生徒の課題を引き出すようにアンケートを実施して、自分たちの課題を自分たちで見出せるよう

支援していきたいと思っている。その取り組みを小学生に広げていけるよう、中学生のアイデアを活かしていきたいと思っている。

・グローバル人材の育成

〈事務局：吉田学校教育課課長〉【資料】により説明

①英語教育

- ・2020年の新学習指導要領実施に向けて、2018年度から小松市の小学校では、外国語活動の先行実施を行うこととしている。松東みどり学園をはじめ、小学校数校では完全実施を行い、その他の学校についても2019年度に完全実施を行っていく。
- ・来年度は、ALTを増員し、すべての中学校に配置する。ALTの小学校への訪問も増え、イングリッシュデイとして、給食を一緒に食べたり、休み時間を共に過ごしたりして、コミュニケーションの素地を養っている。
- ・中学校では、イングリッシュテーブルを充実させるとともに、土曜チャレンジスクールを実施し、ALTとの会話を通じて楽しみながら学んでいく。昨年開発した英語教材、アメージングこまつの活用も推進していく。
- ・(仮称)英語賞については、野田前教育委員からいただいた寄附をもとに、英語に頑張った生徒を表彰していくもの。
- ・幼保連携については、要請に応じてALTを派遣して、歌や絵本で園児と触れ合っていく。小中、さらに生涯に渡って学び続けるということで、公立小松大学との連携も今後深めていきたいと考えている。

②道徳教育

- ・2018年度から小学校で、2019年度には中学校で、道徳は、特別の教科「道徳」として、教科となる。児童・生徒にはぐくむ豊かな心として、小松市では、他を思いやる心、協働して高めあう心を大切にしていく。
- ・今年度策定したふるさと道徳教材「ゆたかな明日へのパスポート」の活用を推進する。児童・生徒へ配布をしているところである。
- ・小松市に関連した10項目を題材として、小中学校教諭の研究員4名、教頭先生3名で教材を作り上げた。
- ・よみがえれ木場潟は木場潟再生プロジェクトを題材として、ふるさとに対する思いを深めていくもの。星が教えてくれたことは、大西宇宙飛行士との交信をきっかけに、なりたい自分に近づこうとする主人公に共感して、自分を振り返る内容となっている。
- ・真っ白な自分の可能性は、中学生サミットに参加した生徒の作文を題材として取り上げ、新しい自分を発見し、自分の可能性に夢を広げていくという資料となっている。
- ・その他についても、小松市ならではの題材を基に構成されており、写真をふんだんに使ったコラム欄も充実している。身近な題材だからこそ状況が明確になり、ねらいについて深く学ぶことができる。さらにふるさと小松市への愛着を深めるきっかけにもなっていくということで、今現在配布しているところである。

〈事務局：諸角小松市立高等学校校長（ゲストオブザーバー）〉【資料】により説明

・グローバル人材の育成

③小松市立高校

- ・平成 30 年は高校が大きく変わる年であり、本日の日付で新学習指導要領が告示された。2022 年の入学生から順次実施される。4 月に入学する生徒については、大学入学共通テストの第 1 期生ということで、高校として準備していかなければならない大事な年となる。
- ・2019 年、現在の高校 1 年生が高校 3 年生になったとき、学びの基礎診断という、小中学という学力テストにかわるものを受けていかなければならない。
- ・2019 年度から総則部分だけは、先行実施される。今高校では総合的な学習時間として展開している。総合的な探求の時間、探究活動が非常に重要視されるようになる。
- ・市立高校では、開学を迎える公立小松大学との連携事業ということで、探求の時間を利用して、理系、文系さまざまな分野で公立小松大学からアドバイスをいただきたいと考えている。
- ・学ぶ意欲が非常に高い生徒については、できれば大学の授業を先行して、講習を受けることで学びの意欲を高めていきたい。
- ・昨年度から、イングリッシュサマーキャンプを、大杉で実施しているが、ぜひ公立小松大学の英語カフェを利用することができればと考えている。
- ・英語の試験が大きく変わるが、その一つとしてスピーキング試験が加わることとなる。市立高校では「GTEC」（ジーテック）を受験してきたが、スピーキング試験は受けていない。今年から、年 1 回 12 月に、全員にスピーキング試験を受けさせる予定である。
- ・「OST」（オンライン・スピーキング・トレーニング）はベネッセコーポレーションのプログラムで、フィリピンの語学学校と契約して、1 回 20 分間から 30 分間、むこうの講師とこちらの生徒が 1 対 1 でずっとコミュニケーションをとるというもの。
- ・これを月 2 回、年間 20 回行っている。日本海側ではまだどの学校もやっておらず、本校が最初である。「Classi」（クラッシー）もベネッセだが先生方の授業、生徒の学習、それから教員、生徒、保護者のコミュニケーションを支援する ICT を活かしたサポートツールである。
- ・ポートフォリオは定期テストとか、校外模試とか、部活動などを Ciassi に記憶していき、それを使って指導に活かしていくもの。
- ・新 1 年生から調査書も変わるが、調査書の中に活動履歴を盛り込んでいくときのエビデンスとして Ciassi を活用していきたい。今年、これら 3 つの施策（公立小松大学との連携事業、OST の導入、Classi の導入に新しく取り組んでいきたいと考えている。

〈山本ゲストオブザーバー〉・公立小松大学としては、開学前から出前授業やオープンラボを開催してきている。英語カフェについては、現在運用方法を検討しており、国際文化交流学部の教員が常駐するので、インターナショナルにいろいろ活用していきたい。

- ・大学のスタンスとしては、高大連携だけでなく、小、中、高と夏休みの自由研究を手伝おうじゃないかといってくれている教員もいるので、少しずつ動いていければと思う。
- ・カブッキーランドは大変賑わっていて、孫が遊んでいる間、祖父母に対して、健康相談室を開けないかと考えている。人生 100 歳以上といわれるが、健康寿命をいかに延ばすかは大きな課題である。
- ・当大学には保健医療系があるので、先生方と協力して、ビルの中だけでなくまちなかにも飛び出して学んでいただきたいと考えている。

〈議長〉プログラミングを学んだ学生がどんどん入ってきてほしい。ボランティアを兼ねながら自分たちも学ぶ仕組みができないかと思っている。

〈山本ゲストオブザーバー〉生産システム科学部は、情報工学を必須にしている。情報テクノロジーの基礎がないとついていけないので。彼らが3年生4年生になると教員だけでなく、学生たちもプログラミング教育のお役に立てないかと思っている。

〈北村委員〉・今回の大学入試制度はとてもよかった。大学の入試のための学びになってきている。本来なら学びというのは、いかに社会に活かす、社会に貢献できるかという事で入試が変わってきたと思う。

- ・英語を話したり、歴史もずいぶん変わっている中で、活かせる学びに着目して、小松市立高校が先を見据えているんなカリキュラムを取り入れることに大変期待している。
- ・高校入試も変わってくると思われる。学校のための学びではなく、社会に活かす。有用性とか、小中学校からしかけていくことが大切。
- ・主体的な学び、自ら考えていく、先生はサポートする、すべての組織がそうなることを祈っている。素晴らしい人材を発掘し、また社会にフィードバックしていくことが重要と思っている。

〈中惣委員〉公立小松大学のような、社会に貢献できる能力を習得したり、間近に見ることができる環境が小松にできたということで、小中学生のうちから公立小松大学に接する機会をつくっていただきたいと感じた。

〈北村委員〉市立高校は北信越で5市しかなく、その一つが当市にあることは大変ありがたいことであり、大学と連携することによって一体となってやれば素晴らしい人材が育っていく。その核となるのが公立小松大学であると思っており、小・中・高校、社会に貢献したり、いろいろなことで提携していくことは大切なことで、大変うれしく思っている。

〈蘆邊委員〉公立小松大学が中高生や中高年の方にいつまでも学ぶ喜び、機会をあたえてくれることを歓迎している。

〈議長〉体力づくり、スポーツ、情操教育、音楽、伝統文化に関しては小松は裾野が広い
と知っている。

〈上出ゲストオブザーバー〉・先日放送大学の卒業式にご縁があつて参加した。登校拒否
をした人などが頑張つて学んでおり、また違う学部にもチャレンジして大学を卒業と
いうことで、素晴らしい方がたくさんいると感じている。

- ・小松でもこうした仕組みができるということで、市民にもっと事例を出して、すばら
しいものになるとよい。
- ・今日のはじめてこの会議に参加したが、小学、中学、高校という言葉はよく出るが、生
涯教育にしても何においてもすべて幼児教育が基本になるので、責任も感じている。
常に幼稚園、保育園があるということ、幼児教育が大事だということを常に思いなが
ら学習面を伸ばして行ってほしいと思っている。配布された副教材「ゆたかな明日へ
のパスポート」を幼稚園、保育園に一部ずつでも頂戴できれば嬉しい。

〈森ゲストオブザーバー〉・この道徳の教材には小松の話題が入っていて、私たちが子供
のころ道徳の教本があつたが、遠い世界の自分たちとあまり関係のない場所の話が多
かつた。これをみると自分たちのすぐ近くで触れることができる題材になっているの
で、興味を持って読んでもらえていいなと感じた。

- ・ぜひこれが各園にあつたら、低学年でこのような道徳を始めていくということを知つ
ておいて、実は道徳の根幹にある、わが子を思いやるという気持ちが、一番スタート
が幼稚園時代というか、3、4、5歳のお友達のことが気にかかる時代に根っこがあ
るという気がする。ぜひ先生方に読んでいただきたいと思っている。

〈上出ゲストオブザーバー〉道徳というのは教え込むのではなくて、子供から私たちが学
ぶことが多い。人間には自然とそういうものが備わっていると子供たちの様子から感
じる。私たちが道徳を教えようということではないのではないかと。

〈石黒教育長〉・小松の子どもは小松で育つ。だから小松を知ることによって小松が好き
になる。ボランティアというが、小松を好きでないとボランティアはできない。大学
を出てもここを去らずに小松で頑張る子どもを作るということもすごく大事だと思
うし、この副読本は大変な労力と時間をかけて作ったものであり、できれば活用して
いただきたい。

- ・上出委員と同意見で、基本は幼い頃にあると思う。親の育て方、対し方というのが非
常に差があると思う。この間もスマホを小さい赤ちゃんに持たせて育てるといふ、24
時間というわけではないが、それで静かにさせるという親御さんもいれば、一日3分
間抱くと子供が良くなるという子育ての本もある。
- ・育て方の価値観というものは非常に違うと思う。そういうものが、小学校、中学校、
高校とだんだん大人になるに従つて、子育ての課題というものが大きく見えてくる
という現状もあると思っている。
- ・そういう意味では、小学校と小さい子ども保育所、幼稚園という、ここ2、3年前か

ら研究をさせていただいているが、具体的に焦点を絞った取り組みとか接続というのも大事ではないかと思っている。

〈諸角ゲストオブザーバー〉高校での道德教育はないけれども、高校生は今まであまりに上からの指示で、教員が何でも段取りしてうまくいくようにやってきたというのがある。できるだけ生徒に何でも任せる、主体性を育てる。教職員には、失敗してもいいからどんどんやらせてみなさいと、失敗の中から学ぶことができるということを行っている。

〈森ゲストアドバイザー〉・小松高校の理数科出身だが、理科など、課題を与えられて、1ヶ月ぐらいずっと同じテーマをやる授業があつて、総合的探求というのはそういうことをやるのかなと期待しながら、あの体験は忘れられなくて、夏休み中に、全然プログラミングとは関係ないが、チャートの書き方を少し学んだ。

- ・興味を持った人のみ参加するという夏休みの特別活動だったが、表をなぞらせてみなさいということをやらせてもらったことが、すごく印象に残っている。自分でやりたくて興味を持ってやったので。総合的探求とはどういう時間なのかと考えている。

〈諸角ゲストアドバイザー〉まさにテーマをそれぞれ与えて、自分でテーマを考えることから始めて、それを1年掛けてずっとやっていく。昔、理数科の課題研究というものがあったが、それをすべての子に広げようとしている。

〈議長〉与えられた仕事をやるだけじゃなく、自分でテーマを設けてこの政策をどうグレードアップしようとか、そこを考えていくのがこれからの役所であり、民間企業と思う。

〈山本ゲストアドバイザー〉・公立小松大学は市民の皆さんによって設立された。地域と共にある。重要な使命と位置付けている。

- ・アクティブラーニングというが、全学部、国際も含めて地元の地域に課題発見解決型の実習、インターンシップを繰り広げる。
- ・美術作家協会から18点の作品の寄贈を公立大学中央キャンパスにいただいた。美術館のようで、学生にとって非常によい教育となる。
- ・3日の学校校歌のお披露目は市立高校の合唱部に行っていただく。一回聞かせていただいたがものすごく完成度が高かった。課外活動の面でも学生たちが、地域の方と交流できればと考えている。

〈石黒教育長〉今日はいろいろな視点で、小松の教育について話し合う機会となった。これからもこのような機会を設けていきたい。

〈議長〉小松は教育熱心なところで、文化度も高い。部分部分はすごくしっかりしている。今回公立小松大学ができたことによって、こども園から大学まで、全体が面でつなが

ってきたと思う。

- ・この面を立方体にしていかないといけない。それが総合教育会議の役割であろうかと思うし、皆様方の力がこれまで以上に必要になってくるので、よろしくお願ひしたい。

○閉 会